

R 4 年度学校経営総括

【1】はじめに

最初にR 4年度学校経営計画の「はじめに」に書かれていた文書を紹介しよう。

この学校経営計画は、単に令和4年度という単年度の経営計画ではない。この学校経営計画には、兵庫教育大学附属中学校がめざすべき、学校像・生徒像が示され、その理想像を実現するための道筋を示すものである。今まで、附属中学校では本格的な学校関係者評価や第三者評価を行ってこなかった。令和3年度に学校評価を行った結果見えてきたのは、附属中学校を映し出す客観的な姿である。我々は、その姿を「我々の到達点」と認識し、「昨日のように今日の仕事をする」のではなく、「昨日とは違う今日の仕事を行い、明日にはさらに創造的な仕事を行う」ことで、我々の理想とする附属中学校に近づいていかなければならない。

以上のような問題意識により、この計画書の構成は、以下のようにする。

1. 附属中学校のミッション
2. めざす子ども像・学校像
3. 学校関係者評価及び学校運営協議会（第三者評価）を踏まえた令和3年度の到達点
4. 中期目標
5. 令和4年度の経営計画

この計画書に書かれているように、我々はR 3年度の学校評価を我々の「到達点」として考え、それを土台にR 4年度の学校経営方針を立案した。今、R 4年度の学校経営総括するにあたり、我々は兵庫教育大学附属中学校の特殊事情を、あまりにも念頭に入れてこなかったことを思い知らされている。その特殊事情とは、附属小学校の事情に大きく左右されること、そして人事異動の激しさという事である。後に詳細なデータを提示し、今年度の到達点を示すことになるが、生徒の学校評価アンケートは、多くの点で下落した。その要因は、今年度入学した1年生の評価が極めて低かったこと、そして昨年度高評価の結果をもたらした40期生の評価が落ち込んだことによる。我々は、この特殊事情をもっと経営に勘案すべきであった。

例えば、入学してきた1年生が「しんどい」という評価は、1学期には多くの教員の共通認識であった。しかし、その「しんどさ」を前提とした「しんどさ」を克服するビジョンや戦略・戦術というストラテジーが、果たして確立されたであろうか？この点についての責任は、経営の最高責任者である校長にある。また、人事異動についても「3年契約」は大学の方針であり、自明の事であった。この人事方針は、公立の中学校に比べて人事異動の激しさを物語るものであるが、それならば「附属中のDNAの継承」のために、日々我々はどうのように努力してきたかに着目しなければならない。この点を踏まえなければ、同じ繰り返しをR 5年度も起こしてしまうであろう。この点は、十分に肝に銘じておかなければならない。

ただし、不安定要素ばかりではない。39期生3年生は、昨年度の低評価を見事に回復した。今年度取り組んだ学校行事の通常化への取り組みやキャリア探究学習、生徒会のルールメイキングの取り組みなどの成果を最も享受したのは、3年生であろう。また、享受してよい頑張りをしたのも事実である。3年生という立場が斯くも彼らを変化させるのか、中学生という時期の急成長を目の当たりにした感がある。まさに、本年度の一番の成果と位置付けてよい。

また、生徒の評価が低かった1年生では、一転して保護者の高評価が目立った。入学当初は附属小との対応の違いに、戸惑いの声も聞こえてきたが、保護者との連携や生徒指導に関する事項について高い評価を得ている。項目によっては3学年の中で一番高い評価の項目も散見できる。この点については、1年間の取り組みが決して無駄ではないことを示している。明らかに1学年年団の取り組みを保護者は評価していると自信を持って良い。次年度に向けて、この土台をさらに固め、生徒の成長に結びつく取り組みが求められている。

個々のデータを見ていくと、昨年度の目標値を下回る項目が多い。これだけを見ていると、R 4年度の学校経営の到達点や課題は、正しく見えてこない。到達点は低く、課題山積で「附属中の学校教育は問題だらけ」となってしまう。よって、個々の方針の評価を示す前に、総論的に到達点と課題を述べた上で、個々の到達点を見ていきたい。

【2】R 4年度の到達点と課題

到達点と課題については、以下の点について述べる。①学校としての機能について②学習面について③生徒指導・生徒会活動等について④進路指導・キャリア教育についてである。

①学校としての機能について

第一に、学校としての機能がどこまで有効に働いているかという点である。この点は、

「附属中学校での学校生活に満足している」(92.4%)

「附属中学校で学んで、人として成長したと思う」(91.9%)

が、昨年度に引き続き90%を超える評価を得ている点に注目すると、十分に機能していると評価してよい。ただし、附属中学校としての使命である「先進的な教育の取り組み」「地域のモデル校」という点では、88.1%で-6.0ポイント下落、+3.2ポイント上昇したとはいえ、74.6%の低評価になっている点は、課題として認識しなければならない。

またこの項目に関連する「Agencyの育成」「SDGs」「深い学び」についても、-8.8、-13.8、-7.1といずれもが5ポイント以上の下落になっている点も忘れてはならない。教育研究校としての復権はまだまだ道半ばである。この課題のエビデンスとして、令和4年度から導入した河合塾提供の学び未来PASSjrの結果は、私たちに、示唆を与えてくれている。結論から述べると、「知識を活用して問題を解決する力」であるリテラシーの伸長には、大きな変化があったが、コンピテンシーには、ほとんど変化が見られなかった。リテラシーとコンピテンシーの変化は、以下の表のようにになっている。

リテラシー	第1回⇒第2回	伸び率 (%)	コンピテンシー	第1回⇒第2回	伸び率
情報収集能力	1.56⇒1.89	27.4	対人基礎力	3.12⇒3.08	-1.3
情報分析能力	2.06⇒2.47	21.2	対自己基礎力	2.79⇒2.77	-0.7
課題発見・構想力	1.79⇒2.01	19.9	対課題基礎力	2.68⇒2.71	1.1
言語運用能力	1.90⇒2.42	12.3			

さらに、キャリア探究総合で力点を置いていた課題に対する各基礎力は、

- i) 「問題の所在を明らかにし、必要な情報分析を行う」(第1回2.74⇒2.88)
- ii) 「問題解決のための効果的な計画を立てる」(R4年度2.8⇒2.69)
- iii) 「効果的な計画に沿った実践行動をとる」(R4年度2.86⇒2.89)

とほとんど伸びていないか、減少する項目さえ見受けられる。また、併せて調査された「生徒の成長感」についても興味深い結果となった。それが次の表である。

成長感項目	肯定感
(1) 計画や目標を立てて日々を過ごすことができる	54.16
(2) 社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる	50.18
(3) リーダーシップをとることができる	46.02
(4) 図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たり、わからないことを調べたりすることができる	83.34

(5)他の人と議論することができる	63.04
(6)自分の言葉で文章を書くことができる	79.27
(7)人前で発表をすることができる	58.34
(8)他の人と協力して物事に取り組める	78.99
(9)コンピュータやインターネットを操作することができる	85.14
(10)時間を有効に使うことができる	48.19
(11)新しいアイデアを得たり発見したりすることができる	59.42
(12)困難なことでもチャレンジすることができる	56.16
(13)人の話を聞くことができる	82.6
(14)自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	76.81
(15)人に対して思いやりを持つことができる	80.07
(16)忍耐強く物事に取り組むことができる	56.52
(17)異文化や世界に関心を持つことができる	63.41
(18)自分を客観的に理解することができる	50.91
全体	65.14

80%以上、大部分の生徒が成長した肯定感を感じた項目を青、60%以下の項目を赤で示している。特に注目したいのが、「(2)社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる」という項目と「(4)図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たり、わからないことを調べたりすることができる」という項目である。私たちがめざしたのは、

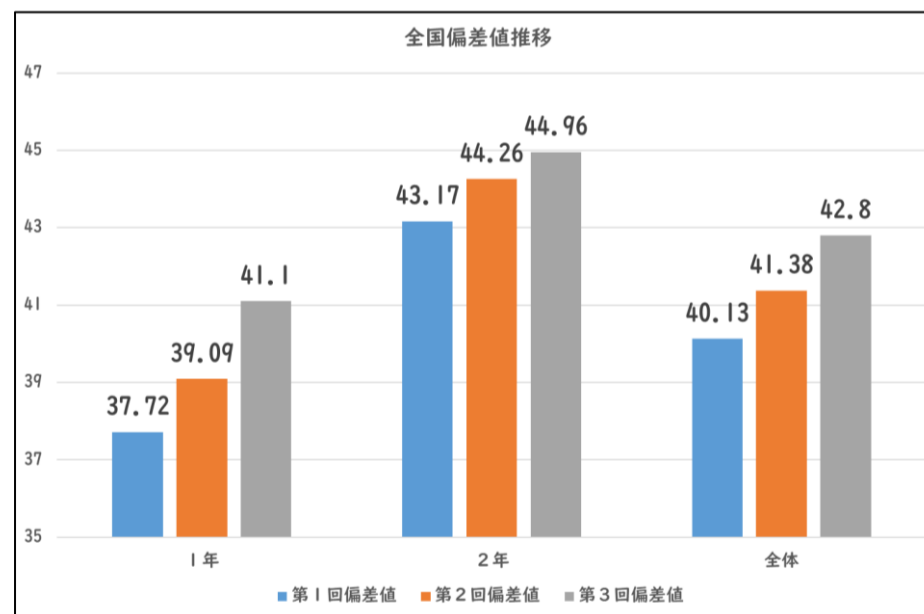
社会的課題に目を向け(2)⇒課題を発見し(2)⇒その解決のために情報収集を行い(4)⇒粘り強く考え(16)⇒新しい考えを得て発見し(11)⇒それを他との協働活動でまとめ上げ(8)⇒他への影響を与える(6)(7)

ではなかった。しかし、その過程の中で求められる力を身に着けたと成長感を感じた生徒は、私たちのめざすべき到達点には達していない。この原因はどこにあるか？一言で言えば、「深い学び」が未だ不十分であるということである。これは、令和3年度の学校経営総括でも指摘されていた点である。あらゆる教育活動の中で「深さ」を追求すること、それが未だに克服されていない。この点を私たちは真摯に反省しなければならない。令和5年度の活動においては、何にもまして、「深さ」の追求を試みなければならない。

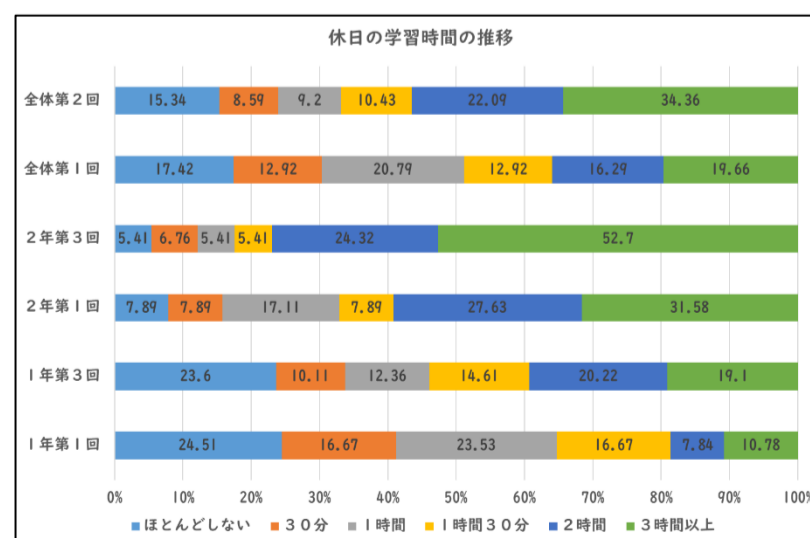
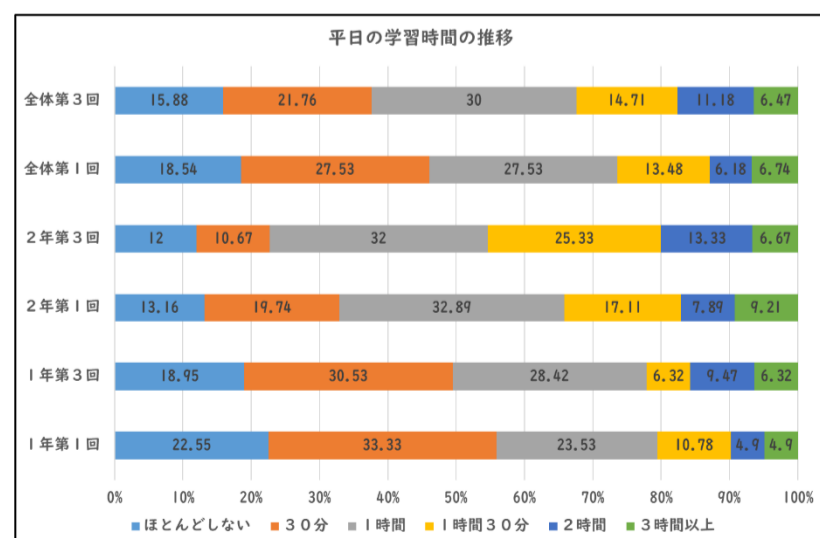
これらの項目の評価が高い評価に移行していけば、いわゆる「上昇のサイクル軌道」に乗ることができる。その「重い歯車を回している」と思えば、またやりがいも出てくる。

②学習面について

第二に、学習面である。相変わらず「学校の授業だけで、進路実現に必要な力がつく」は厳しい評価で、生徒・保護者両方全ての項目で最低値になっている。学力格差が大きい附属中の現状では、相当手厚い手立てを打たなければ肯定感の向上は見込めないと思われる。昨年度の結果から今年重点項目として考えたのが、「個別最適化の教育」の推進である。その目玉としてAIツールのQubenaを導入した。その成果として、学力推移調査の結果、以下の成果が表れている。偏差値は、以下のように推移し、上昇傾向にある。



また、学習時間については、以下のように変化が見られた。



①平日（1時間30分以上）

1年 20.58%→22.11%に増加 2年 34.21%→45.33%に増加

②休日（2時間以上）

1年 18.62%→39.31%に増加 2年 59.21%→77.02%に増加

ただし、未だに休日さえ30分以下しか勉強しない生徒が1年生で33.71%（1/3）、2年生で12.17%いる。

このような学習に関する成果が見られる一方、「学校は、自分の学習レベルに応じた教材や学習方法を提供してくれる」の項目は、77.1%（前年81.8%）に下落した。この要因は1年生が69.6%と大きく下落したことによる。1年生のこの数値の背景には、我々の想像以上に

- 1) 附属小を中心に家庭学習の習慣の欠如があること
- 2) 学習への意欲が低く、そもそも学習する必要性をあまり感じていないこと
- 3) 学習への持続性も低いこと

がある。個別最適化の教育の推進には、AIツールを提供するだけでは、この壁を破ることは困難ではないかということである。単に学力の格差という言葉では言い表せない「意欲の格差」「持続力の格差」から「学習習慣の格差」が顕著であるということである。この壁を突破するためには、保護者との連携が必須である。子どもはまだまだ自覚してなくても保護者は中学卒業後の高校進学を想定する。今のような学力や学習状況ならば、望む進学先は多くの生徒にとって困難であるということを確認してもらう必要がある。今の3年生がどれくらいの校内成績でどれくらいの模擬試験の偏差値を獲得し、それがどのような進路に結びついていったのか、できる範囲で情報提供する必要があるのでないか。そのような取り組みをR4年度末からR5年度年度当初にする必要がある。

更に検討が必要なのは、授業の在り方である。現在一斉授業を実施しているが、その授業についていけない生徒が別室での学習を行っている。しかし、別室で学習していない生徒の中にも学習内容を理解していない生徒は少なからずいる。学習補助員が、そして学生が補助員としてサポートに入っているが、これだけでは間に合わないほどの学力格差があるように思われる。そこで、学力格差を生み出しやすい英・数の授業で、「習熟度別授業」の導入を検討してみよう。次年度は、働き方改革の施策として「補助員の2名増員」が約束されている。当初は、現在学習補助員の役割を各学年1名ずつと考えたが、英・数の教員免許を持つ補助員を非常勤として雇用し、英・数の授業を1クラス2展開で実施するという案である。

③生徒指導・生徒会活動等

第三に、生徒指導・生徒会活動などである。全体の傾向と同じく、1年生の低評価、2年生の落ち込みにより全体としてマイナス評価になっている項目が多くあるが、39期生の挽回が激しい落ち込みを防いでいるという構図である。これも、附属小の生徒指導の弱さが如実に反映しているとはいえ、もっと早くに立て直し戦略を持つべきであったということに尽きる。現在も続けている「チームとしての対応」「即日での対応」は継続していくべきである。マトリックス組織の結節点に位置する教員は、各組織の「しんどいところを引き受ける」という心構えが必要である。

生徒会活動は、昨年度のキャリア探究総合を発端として、「ルールメイキング」の取り組みが前進した。このルールメイキングの取り組みは、我々がめざす「Agencyの育成」大きく貢献すると思われる。今後も大きく前進させなければならない取り組みである。このルールメイキングには、全国組織「みんなのルールメイキング」が発足している。ルールメイキングには、単に校則を作るという意味だけではなく、民主主義の在り方、組織運営の在り方など、生徒を成長させる要素が多分にある。全国組織に参加し交流を促進する中で、本校のルールメイキングの質を向上させることも課題である。

④進路指導・キャリア教育

第四に、進路指導である。今年度は、昨年度低評価に終わった進路指導に関する項目は、2年生・3年生の取り組みで好転したと言える。ただ、キャリア教育の部分での弱さが残った。この影響は特に1年生・2年生に及んでいる。前述したように、兵庫県独自の取り組みである「トライアルウィーク」を附属中は取り組んでいない。キャリア探究総合の取り組みの中で、「現地で学ぶ」＝フィールドワークを実施することで、キャリア教育の視点を含めることができないか。検討の余地はある。

⑤国際バカロレア化について

12月に候補校に認定され、本格的な取り組みが実施される。令和4年度に議論を重ねた概念教育を実践する年である。本腰を入れて取り組まなければならない。といっても生徒を置き去りにして取り組んでも意味がない。我々にとっては、生徒の課題である「深い学び」を如何に実践するかということとの関連でこの「概念教育」を捉え、確実に一歩ずつ進むことが求められる。もう一度、繰り返して言うが、国際バカロレアの教育というのは、何も特殊な教育ではない。現在の学習指導要領の行きつく先に国際バカロレアというゴールがある。この意味において、「地域のモデル校」＝「国際バカロレア認定校」なのである。この認識を教員全員で共有することが重要である。

⑥働き方改革について

この間の急激な環境の変化により、大学の求める要求と附属中の現場に大きな乖離が起こった。しかしながら、部活動指導員の設置をはじめとする条件整備も行われることが決まった。今まで、事務職員を中心に作成された「36協定」についても山国地区の教員を働き方に応じた内容に変えていかなければならない。

【3】第三者評価について

実施日：令和4年12月7日 評価実施者：兵庫教育大学学校経営コース 教員及びゼミ生

<報告内容>

1. 国際バカロレア（IB）教育に向けた授業改善

率先して挨拶ができる素直で元気な生徒、服装や身だしなみも整っており、規律をしっかり守って、前向きに教育活動に取り組んでいました。このような生徒の様子から、附属中学校の教職員が組織的に動き、一貫した生徒指導に日々継続して取り組んでおられていることがわかりました。授業においても生活習慣と同様に、学習規律がしっかりしており、その上で主体的に対話的な授業を展開されていました。教師との対話、パートナーとの対話、英語の授業では外国の方とのオーセンティックな対話を楽しみ、国語の「平家物語」の授業では物語との対話を楽しみ、生徒自らが学習の主体となって取り組む姿が多く見られました。これも、IB認定校化へ向け「IB推進プロジェクト会議」、「学際的単元チームの立ち上げ」など多くの研究プロジェクトチームを立ち上げたり、認定校との交流を行ったりするなど、着実にご準備されてきた成果だと思います。

【更なる高みを求めて】

一方で、「なんとしても令和6年にIB校に認定されるのだ」という気概を多くの授業で見られなかったのが残念でした。もちろん、先生方の中にはその気持ちは確実におありだと思います。上野校長は、「附属中の先生方はみなさん優秀で、どの先生も教科の指導力があり、IB認定に向け頑張ってください」と教職員への信頼は絶大でした。恐らく私たちがそう感じたのは、授業において目に見える組織的な取り組みがなされていないことが原因の1つのように感じます。できれば令和6年のIB校認定に向け、逆向き設計で1年ごとに授業での短期目標を掲げ取り組む等、組織的に計画を立て、着実に進まると良いと思います。認定化へのシナリオを可視化することができれば、先生方の異動があっても、次にこられた先生への引き継ぎがしやすいというような利点もあります。初期の取り組みとして、研究主任を中心として、ユニットプランナー（重要概念、探究テーマ、評価の為の課題と評価基準、ATLスキル、学習者像などを明記したもの）を作成して授業を行う等、組織的に実施されるのはいかがでしょうか。

2. 全ての生徒が輝く学校（個への対応、学校の環境）

河合塾のみらいPASSジュニア、ベネッセの学力推移テスト、AIツールQubenaなどを基に、目に見える数値のデータを使用し生徒が主体的に学ぶ、agencyの育成に活用されている点など、創意工夫がめざましいです。また、知識などを含む一般的な「学力」だけではなく、行動特性を見るコンペティテスト、時間の使い方などのスキルなどもデータにして見るところなど他の学校ではなかなかなく、創意工夫されていました。探究学習は、生徒も教師も学び続けるという方針で3年間を組織立て、たくさんの地域の方も巻き込み先進的な取り組みをなされていることがわかりました。小学校までに大部分の生徒が定着できなかった学ぶ姿勢や、学ぶ楽しさを生徒に実感してもらうために、なんとか中学校で力を付けさせようと先生方が丸となり、工夫されている証拠だと思います。更に生徒を中心としたルールメイキング、各行事の進行なども同様にあげられます。

【更なる高みを求めて】

IBも強調してインクルーシブ教育の重要性を述べており、生徒の多様性を重んじ、個々の学び方の違いを尊重する方法を学校が整備するよう求めています。「個に応じた指導」というコンセプトで学校全体を見渡すと、昨年と引き続きこの概念が少し弱いように感じます。生徒のアンケートを見ても、学校の指導に対して生徒達が納得していることがわかります。ただ、悩みを相談できる教員、養護教諭、カウンセラーがいるという項目のところ全体に比べ低く、気になります。全体としては行き渡っている指導も、生徒の「個」に対しての支援の充実が求められていると感じました。具体的には、朝のホームルームで先生が生徒一人一人の顔をみずじみずタブレットだけを見て事務連絡をされている場面、生徒はタブレットを使用しているのに気づかない場面、生徒が遅刻してきても先生が声をかけない場面等がありました。又、学校環境においては、卒業制作のタイルが数カ所剥がれそうになっていたり、掃除道具倉庫の上がちりとりが置かれていて落ちそうになっていたり、トイレの換気扇のホコリ、極端に暗い図書室等が気になりました。安全点検については、もう一度全体で確認され、生徒達が気持ちよく学校生活を送ることができるように環境整備していただけるとありがたいです。

3. 地域のモデル校としての責務

生徒アンケートからも大部分の生徒は附属中での生活に大変満足をして、楽しく生活していることがわかりました。短い時間ではありましたが、観察させていただいた

様子や頂いた資料から、先生方が先進的な教育を提供する附属中に勤務しているという立場を理解し、日頃から生徒を大切にしながら、教職員同士力を合わせて地域のモデル校としての責務を全うしようとされていることがわかりました。3年間で「生徒に付けさせたい力」もこれから生徒に求められる力をよく分析された上で、実際に現在附属中に通っている生徒の文脈におとし、10の学習者像で明確に提示されていることがわかります。上野校長の強いリーダーシップのもと、時間を割いて私たちに丁寧にご説明くださった探究総合担当の先生、研究主任、生活指導主任、資料を作成してくださった、生徒会担当の先生など、ミドルリーダーのご活躍もめざましく、皆さんで力を合わせ、学校組織の活性化にご尽力されている様子を伺うことができました。又、上野校長が先生方を信頼して任せている場面や、先生方が様々な提案に前向きに取り組まれ、生徒の為に頑張っている様子を拝見させて頂きました。その学校マネジメントの姿は、現在学校経営コースで学んでいる私たちにとって大変参考になりました。

【更なる高みを求めて】

私たちは附属中の第三者評価を行う1週間前に加東市東条学園小中学校を視察する機会がありました。建物がとても立派で新しく、環境が抜群に良く、建物だけが良いわけではなく、中身も充実しており、ただの小中一貫校ではなく、4(小1~小4)・3(小5・6、中1)・2(中2~中3)のステージごとの教育の充実を目指し、9年間の継続した教育が有効的に機能している様子を拝見いたしました。その点、附属中はもともとある大学附属学校の強みが生かされず、連携がなされていない実態をお伺いし、とても残念です。2025年春開校の社学園など、周りの状況から考えて「地域のモデル校」としての位置づけはこのままの状況では危うく、まずは小中学校で何らかの連携の具体的なアクションを起こすことが急務です。まずは小学校、中学校のお互いの強みについて話す機会の設定、お互いの大切にしていることを共有したり、教職員間の交流を行ったりすることが大きく踏み出す第1歩だと思います。そして最終的には小学校にもPYPを取り入れることを考慮していただけると、生徒にとって負担なく、より深くIBでの学びができ、資質向上につながると思います。

【総評】

昨年から引き続き附属中学校の教職員は組織的に継続して、生徒に基本的な生活習慣を身につけられるように支援をし、生徒が楽しく学校に登校し、国際バカロレア教育の概念を通して、様々な創意工夫をして、生徒が豊かな学びができるようなご指導をされていることがわかりました。ただ、現状に満足することなく、更なる高みを求めて頂く為に、学習指導では、ユニットプランナーを用いた取組等、IB認定校への道筋が組織的に計画的に行われることを提案いたします。生徒の支援ではIBでも求められているインクルーシブ教育の推進や生徒の個に応じた支援、安全管理などを含めた更なる環境支援などを期待いたします。又、地域のモデル校として小中連携に向けた小学校との歩み寄りの一歩となる具体的なアクションがあることを望みます。私たちも兵庫教育大学に学ぶ者として、附属中の教職員が目指されている国際バカロレア教育の概念を通して、VUCAの時代を生き抜く資質能力を身につけた、生徒の育成にこれからも寄与されることを切に願います。最後に、元氣な挨拶をしてくれた附属中の生徒、飾ることなく日頃の様子を見せてくださった先生方、時間を割いて私たちに説明くださった先生方、このような学びの機会を下さった管理職の先生方にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【4】R4年度評価

以下、R4年度の学校目標に関して、その設定目標に関する到達度を示す。5ポイント以上の下落を×、5ポイント以内の下落を△、5ポイント以内の上昇を○5ポイント以上の上昇を◎とした。

中期目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
<p>(1) 持続可能で多様性に富んだ社会の実現に必要な学びを教育活動のあらゆる分野で推進する。</p>	<p>①SDGsを中心テーマに探究活動のSTEAM化を推進することでagencyを育てる</p>	<p>1) 本校研究主題であるSDGsを中心テーマとした探究活動をととして、その学習課題を解決する過程でagencyとしての資質・能力を育てる</p> <p>2) 充実した教育研究のための三カ年における系統的な教育体制と教育環境のシステム構築</p> <ul style="list-style-type: none"> 総合的な学習の時間における系統的な探究学習の確立 各教科・領域においてSTEAM化を念頭においた課題発見解決学習の実践 	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「自ら課題を発見し、自分の身の回りから社会を変革する力がついた」(R3年肯定感85.5%→R4年度87%以上)</p> <p>ii) 「附属中学校は、SDGsに積極的に取り組んでいる」(R3年肯定感90.9%→R4年度92%以上)</p> <p>iii) 「自分の意見を論理的に述べることができたり、根拠を示しながら意見を言うことができるようになった」(R3年肯定感85.9%→R4年度87%以上)</p>	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「自ら課題を発見し、自分の身の回りから社会を変革する力がついた」(R4年度76.7%×(-8.8))</p> <p>ii) 「附属中学校は、SDGsに積極的に取り組んでいる」(R4年度77.1%×(-13.8))</p> <p>iii) 「自分の意見を論理的に述べることができたり、根拠を示しながら意見を言うことができるようになった」(R4年度78.8%×(-7.1))</p>
<p>(2) 「主体的・対話的で深い学び」の授業を実践し、協働的な学びを推進することで「新しい学力観」の育成を図る。</p> <p>別最適化学習の実践を通して行う。</p>	<p>①「主体的・対話的で深い学び」の授業を実践し、協働的な学びを推進することで「新しい学力観」の育成を図る。</p> <p>②個別最適化学習を推進し、学力の伸長および定着を図り、確かな学力を育成する。</p>	<p>1) 国際バカロレアの概念教育の理解を進め、各教科で教材の蓄積を行う。</p> <p>2) 「対話型論証モデル」への理解を促進し、「深い学び」への取り組みを強化する。</p> <p>3) 7月・12月に授業アンケートを実施し、各教科での検証を行う。</p> <p>1) ベネッセの学力推移調査を1・2年生に導入し、学力の推移を全国レベルで把握するとともに、学習状況調査に基づく、個々の生徒の学習状況を把握し、個に応じた学習指導を行う。</p> <p>2) AIツールを活用(QUBENA)し、個別最適化教育を推進する。</p>	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「附属中学校で学んで、学習の内容を理解できるようになった」(R3年肯定感92.3%→R4年度94%以上)</p> <p>ii) 「授業や学級活動等で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」(R3年肯定感91.4%→R4年度93%以上)</p> <p>iii) 「学校は、自分で計画を立てて学習するように指導している」(R3年肯定感86.8%→R4年度88%以上)</p> <p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「学校は、自分の学習レベルに応じた教材や学習方法を提供してくれる」(R3年肯定感81.8%→R4年度83%以上)</p> <p>ii) 「学校の授業だけで、進路実現に必要な力がつく。」(R3年肯定感72.3%→R4年度75%以上)</p>	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「附属中学校で学んで、学習の内容を理解できるようになった」(R4年度85.6%×(-6.7))</p> <p>ii) 「授業や学級活動等で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」(R4年度92.8%○(+1.4))</p> <p>iii) 「学校は、自分で計画を立てて学習するように指導している」(R4年度85.6%△(-1.2))</p> <p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「学校は、自分の学習レベルに応じた教材や学習方法を提供してくれる」(R4年度77.1%△(-4.7))</p> <p>ii) 「学校の授業だけで、進路実現に必要な力がつく。」(R4年度63.6%×(-8.7))</p>

<p>(3) 心身を鍛え、強い意志と体力と互いを信頼し共に助け合い磨き合う生徒の育成</p>	<p>①ものごとを真剣に考え、適切に判断し、進んで行動する生徒の育成</p>	<p>1) 自立・自律する生徒集団の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら考え判断し、共に助け合い、磨き合う生徒の育成を図る。(自立) ・学級や部活動、家族や地域等の社会の一員として自覚し、「今の自分に何ができるのか」を考え、自らの規範意識をもち、強い意志で行動できる生徒の育成を図る。(自律) ・学年集会等において、教師側が感じる生徒の成長を語り、これからの期待を込めて説諭する機会を大切にする。(成功体験の自覚化を図る) ・「どうした・どうしたい・何してほしい」を基本に、生徒の気持ちを汲み取りながら、自己解決に向けた丁寧な対応を心がける。 ・生徒の関心に関心を持ち、共に考え行動できる教師集団を目指す。(生徒との信頼関係の構築) ・社会や学校のルール、決まりを生徒と共に考え、守るべきことは守り、よりよく生活するために改善できる部分は改善していくように努める。 	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 「附属中学校で学んで、人として成長したと思う」(R3年肯定感95.9%→R4年度95%以上を維持) ii) 「学校生活について学校の指導には納得できる」(R3年肯定感90%→R4年度92%以上) iii) 「学校は、学校や社会の決まり・マナーなどを守るように指導している」(R3年肯定感93.6%→R4年度95%以上を維持) 	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 「附属中学校で学んで、人として成長したと思う」(R4年度91.9%△(-4.0)) ii) 「学校生活について学校の指導には納得できる」(R4年度83.5%×(-6.5)) iii) 「学校は、学校や社会の決まり・マナーなどを守るように指導している」(R4年度90.3%△(-3.3))
	<p>②主体的に取り組む生徒会活動、日常的な部活動の充実、感動と連帯感のある学校行事の充実を促進することで生徒集団の育成を行う。</p>	<p>1) 生徒会活動について</p> <p>①専門部会における活動の充実化とそれ実現に向けた専門部会の持ち方の再検討。→専門部員が受け身にならず主体的に活動を推進していくような部会の持ち方に変えていく(昨年度報道部の取り組みを参照)。</p> <p>②そのために、生徒会本部役員並びに専門部長からの取り組みに対する発信力とファシリテーション能力の向上を図る。→本部役員と専門部長が専門部会の持ち方について検討する会を定期的(隔週実施)に開催する。</p> <p>③①と②の充実を図ることで、行事活動においても、諸専門部会が自らの役割を一層自覚しながら、より主体的に責任をもって活動に取り組めるようにする。</p> <p>④また、行事関連のプログラム内容や進行の仕方については、生徒・教員の共同プロジェクト会議を実施して、より生徒の意見や思いが反映されつつもコンセプトが明確な行事の開催を目指す。</p> <p>2) 部活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科を中心とした学習活動(特に探究学習)を通して学んだ見方や考え方の応用を促し、日々の学習活動と部活動との結びつきがあることを自覚させることで、生徒がより主体的・対話的な活動が実施できるように支援していく。 ・部長を中心とした自立的・自律的な活動の中で心身の鍛錬を促す。 ・活動のPDCAサイクルを顧問と生徒が一体となって行っていく。 ・顧問間の連携を図り、部を越えた活動の見守りを行っていく。 <p>(信頼関係づくりやSOS発信の促し、アンケート実施)</p>	<p>学校評価アンケートについて</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 「学校は生徒会活動が活発になるように工夫している」(R3年肯定感90.9%→R4年度93%以上) ii) 「学校は体育祭や友嬉祭が充実するように工夫している」(R3年肯定感89.1%→R4年度93%以上) iii) 「部活動に意欲的に取り組んでいる」(R3年肯定感89.1%→R4年度92%以上) 	<p>学校評価アンケートについて</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 「学校は生徒会活動が活発になるように工夫している」(R4年度83.9%×(-7.0)) ii) 「学校は体育祭や友嬉祭が充実するように工夫している」(R4年度94.5%◎(+5.4)) iii) 「部活動に意欲的に取り組んでいる」(R4年度83.1%×(-6.0))

<p>③安全安心な環境を整備することで、互いが認め合い尊重し合える自律する集団づくり、信頼できる人間関係を構築する。</p>	<p>1) いじめ防止のとりくみ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師が生徒の様子を把握し、適宜適切に指導する。 ・生徒がお互いに承認し合えるような仲間づくりを行う。 ・いじめを見た子どもが教師などの大人に報告しやすい環境をつくる。 ・生徒の訴えやアンケート結果等に真摯に向き合い、生徒一人ひとりに寄り添った丁寧な対応を行う。その際、保護者との連絡・連携を密に行う。 ・いじめや命に関する道德教育において、教材の充実を図る。 <p>2) スマホ・SNS 等情報教育の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険アプリ等の最新情報を常に入手し、情報モラル教育の充実と注意喚起の強化を図る。 ・情報関係の外部機関と連携した講演会を実施する。さらに、その事後指導や経過を観察し、使い方の継続指導を行う ・教育委員会青少年センターやサイバーパトロール（監視行動）等、外部関係機関との連携を密に行う。 ・配布されるリーフレット等を活用した指導を行う <p>3) 安全・安心の学校生活の構築</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の健康について、生徒の生活のリズムの把握とそれに伴う日々の声かけ、家庭と連携した見届けを行う。 ・危険な場所や行動に気づき、お互いに注意し合える自浄作用を育むためのリーダーの育成や教師による説諭、仲間づくりを行う。 <p>4) 教育相談の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が職員に相談しやすい関係づくりに努める。そのための日常のあいさつや会話を大切にする。 ・適宜アンケート項目の検討・見直しを行う。 <p>5) 不登校及び発達障がいなど、課題のある生徒へのきめ細かい対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不登校生徒及び課題のある生徒に対して、個々の状況を適切に分析し、大学や地域の医療機関との連携を図りながら、適切な支援を行う。特に発達障がいがある生徒には、個別支援計画を作成し、適切な指導を行う。 	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「命の大切さや人権を尊重することの大切さについて学ぶ機会があった」(R3 年肯定感 96.8%→R4 年度 95%以上を維持)</p> <p>ii) 「学校は、日頃から生徒たちの問題（いじめなど）の早期発見に取り組んでいる」(R3 年肯定感 82.3%→R4 年度 85%以上)</p> <p>iii) 「学校は、インターネットや携帯電話の危険性やルール・マナーを指導している」(R3 年肯定感 94.1%→R4 年度 95%以上)</p> <p>iv) 「学校は、自分の健康や安全について気を付けて生活するように指導している」(R3 年肯定感 94.5%→R4 年度 95%以上)</p> <p>v) 「悩みや困ったことなどを相談できる教員、養護教諭、カウンセラーなどがいる」(R3 年肯定感 79.1%→R4 年度 82%以上)</p>	<p>学校評価アンケートにおいて</p> <p>i) 「命の大切さや人権を尊重することの大切さについて学ぶ機会があった」(R4 年度 88.1%×(-8.7))</p> <p>ii) 「学校は、日頃から生徒たちの問題（いじめなど）の早期発見に取り組んでいる」(R4 年度 77.5%△(-4.8))</p> <p>iii) 「学校は、インターネットや携帯電話の危険性やルール・マナーを指導している」(R4 年度 86%×(-8.1))</p> <p>iv) 「学校は、自分の健康や安全について気を付けて生活するように指導している」(R4 年度 91.9%△(-2.6))</p> <p>v) 「悩みや困ったことなどを相談できる教員、養護教諭、カウンセラーなどがいる」(R4 年度 77.5%△(-1.6))</p>
--	---	---	---

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">(4) 高い志をもって己の生き方を考え進路実現するキャリア教育の推進</p>	<p>①自らの生き方を考える社会的・職業的自立を目指したキャリア教育、進路指導の充実を推進する</p>	<p>1) キャリア教育の充実 (2年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1・2年生のキャリア探究総合を将来のキャリアに結びつく内容に再編成し、社会の様々な分野で働く「プロ」の仕事ぶりを学ぶことで、「働くことの意味」を学ぶ。 ・1・2年次から様々な職業を実現することをルート「〇〇になるには特集」を、その分野の現役で働く人を招いて学習する。 <p>(1年)</p> <p>○情報活用能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な人の職業インタビューを行い、様々な職業を知る活動を行う。 ・キッサニア甲子園の体験プログラムに参加することで、働くことの意味ややりがい、お金の価値などを知り、自分の将来について深く考えさせる。 <p>○人間関係形成能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己理解を深めるために、他者の意見を聞きながら、自分の良さについて考えさせる。 ・発表の機会を多く設定することで、自分の考えを適切に伝える能力を身に付けるとともに、相手の考えを受け止める態度を育てる。 <p>○将来設計能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・係や当番などを通して生活上の役割を果たす責任感や連帯感を育てる。 <p>○意思決定能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・継続的に生活や学習の振り返りを行うことで、自ら課題を見出していくことの大切さを理解させる。 <p>2) 進路指導の充実 (3年)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在の実力判定に加えて、外部模試を導入することで、進路実現に向けた視野を広げ、切磋琢磨する資質を育成する。 	<p>学校評価アンケートにおいて、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 「学校は、将来の夢や希望の実現に向けて努力するように指導している。」(R3年肯定感 83.6%→R4年度 85%以上) ii) 「働くことの意味や職業について考え、理解が深まる機会が多い。」(R3年肯定感 75.9%→R4年度 77%以上) iii) 「自分の適性や進路について考える機会が多い。」(R3年肯定感 79.1%→R4年度 82%以上) iv) 「学校は、将来を考えたり調べたりするきっかけや情報を提供している。」(R3年肯定感 80.5%→R4年度 83%以上) 	<p>学校評価アンケートにおいて、</p> <ul style="list-style-type: none"> i) 「学校は、将来の夢や希望の実現に向けて努力するように指導している。」(R4年度 81.4%△(-2.2)) ii) 「働くことの意味や職業について考え、理解が深まる機会が多い。」(R4年度 73.7%△(-2.2)) iii) 「自分の適性や進路について考える機会が多い。」(R4年度 74.6%△(-4.5)) iv) 「学校は、将来を考えたり調べたりするきっかけや情報を提供している。」(R4年度 80.5%- (0.0))
---	---	--	--	--

<p>(5) 現代的教育課題の解決に挑む教育研究活動を推進し、国際バカロレア認定校をめざすこと、地域のモデル校としての役割を担う。</p>	<p>①(1)～(4)の教育活動を実践し、国際バカロレア認定校をめざす。</p> <p>②現代的な教育課題に果敢に挑戦し、地域のモデル校の役割を担う。</p> <p>③地域に魅力ある学校として発信を強化し、定員割れ問題を解決する。</p>	<p>1) 国際バカロレアの推進体制を整備し、候補校申請の準備を進める。 ア) IB コーディネーターへのWSの実施を1学期内に実施し、教員全員へのWS・教科主任へのWSを夏季休業中に実施する。 2) 定期的に国際バカロレア先進校のIB コーディネーターを招いて、研修を実施する。</p> <p>1) 大学との連携の推進 ・国際バカロレア認定校となるための組織的計画と実践 ・探究学習における「深い学び」の実現にむけての協働研究の促進 ・「STEAM Lab」研究を活かしたICTを活用した実践 ・教科、領域における基礎、基本の習得を基盤とした発展的単元学習の開発 2) 研究協議会について ・SDGsに関する探究活動での学びの発表とその基盤となる教科横断的学習の取り組み ・SDGs 実践校や国際バカロレア認定校との研究交流 ・幼、小、中の系統的な学習の模索</p> <p>1) R3年度の広報活動の成果を踏まえ、6月末、7月末にオープンスクールを実施、9月に公開授業を実施する。 2) 広報用独自パンフレットを作成する。 3) 各種説明会、近隣塾への広報活動を行う。 4) webpageの更新を頻繁に行い、学校の状況を細かく報告する学年ブログ、生徒会ブログなどを開設する。</p>	<p>9月までにIB候補校申請を行う。</p> <p>学校評価アンケートにおいて i) 「附属中学校は、求められる教育に積極的に挑戦している。」(R3年肯定感94.1%→R4年度95%以上) ii) 「学校は、積極的に地域と連携し、地域のモデル校の役割を担っている」(R3年肯定感71.4%→R4年度74%以上)</p> <p>研究協議会において i) 参加者数 (R3年度100人→R4年度150人以上)</p> <p>入試倍率において i) 入試倍率 (R3年度0.96倍→R4年度1.0倍以上)</p> <p>学校評価アンケートにおいて i) 「学校は、通信やHP(ホームページ)等で適切に情報を発信している。」(R3年肯定感89.5%→R4年度90%以上)</p>	<p>12月に候補校に認定された。(○)</p> <p>学校評価アンケートにおいて i) 「附属中学校は、求められる教育に積極的に挑戦している。」(R4年度88.1%×(-6.0)) ii) 「学校は、積極的に地域と連携し、地域のモデル校の役割を担っている」(R4年度74.6%○(+3.2))</p> <p>研究協議会において i) 参加者数 (R4年度89人×)</p> <p>入試倍率において i) 入試倍率 (R4年度1.17倍◎)</p> <p>学校評価アンケートにおいて i) 「学校は、通信やHP(ホームページ)等で適切に情報を発信している。」(R4年度85.6%△(-3.9))</p>
<p>(6) 未来を語る本物の大人、新しい教育課題に挑む切磋琢磨するチーム附中の教職員集団</p>	<p>①(1)～(5)の教育課題に果敢に挑戦し、実践する教員集団</p> <p>②大学と一体となった先導的な教育実践研究の推進し、先導的な教育手法を取り入れ、先導的な教育実践研究を推進する</p> <p>③働き方改革を促進し、働き甲斐のある職場を構築し、教育研究の向上をめざす。</p>	<p>1) 教職員組織はマトリックス組織であることの理解を促進し、学年・分掌・教科などの連携強化を促進する。 ・共通理解・共通実践で迅速に対応できるようにする。 ・毎日の出来事を日報として記載し、全教職員で共有していく。 2) 職員研修を計画的に実施し、教員の能力・資質の向上を図る</p> <p>1) 探究学習における兵庫教育大学附属中学校独自の系統的指導計画開発 2) 個別最適化に関する教育手法の協働研究 3) 学習支援を必要とする学習者に対する先導的な指導体制の組織化</p> <p>1) 附属学校運営委員会下のWTにより、附属学校園の働き方について労働基準法に則った改革を行う。 2) 労働時間管理、超過勤務の正確な把握のために、出退勤管理システムの導入を行う。 3) 割り振りの項目の再検討を行い、教師の労働実態に即した内容とする。</p>	<p>学校評価アンケートにおいて (1)～(5)の上記の各項目と同様</p> <p>研究協議会において 上記の項目と同様</p> <p>超過勤務調査において i) 出退勤管理システムの導入 ii) WTでの働き方改革の再検討を踏まえた方針の樹立</p>	<p>学校評価アンケートにおいて (1)～(5)の上記の各項目と同様</p> <p>研究協議会において 上記の項目と同様</p> <p>超過勤務調査において、 i) 他の附属学校園に先駆けて、BLENDによる調査を導入し、客観的な勤務ジッタ把握を行う。 ii) 働き方改革を巡る情勢の急激な変化があり、大学と附属中学でその対応を巡り齟齬が生じたが、次年度の条件整備に前進を得た。</p>